



リンカーン大学(ニュージーランド)の 図書館紹介

早矢仕 有子(法学部准教授)

日本には約750の国公私立大学が存在しますが、ニュージーランドの大学数はたった8校(すべて国立)です。やや日本より小さな国土に430万人の人口(日本の約3%)しか住んでいないのですから無理もありません。私が2008年9月から滞在しているリンカーン大学(Lincoln University)は、南島クライストチャーチ郊外に位置し、1878年に農業大学として創設された国内で3番目に古い大学です。農業分野に伝統があり、ニュージーランドで唯一、「ワイン醸造科」を持ち人材を輩出している大学としても知られています。比較的最近の1990年に総合大学となり、現在、「農学・生命科学部(Agriculture and Life Sciences)」、「商学部(Commerce)」、「環境・社会・デザイン学部(Environment, Society and Design)」の三学部にて約4,500人の学生が所属しています。学生数は札幌大学と同規模ですが、教員は札幌大学を70人上回る約220名が在籍しており、「少人数教育」がうたい文句のひとつです。ニュージーランド出身の学生は三分の二に満たず、約60の国々から服装も年齢も様々な学生たちが集まり多様な言語が飛び交っています。広い空の下、広大な農場に囲まれたキャンパスは、農学部出身の私にとっては懐かしい風景でもあります。

敷地の中央部に位置し、学内でひときわ目を引くゴシック調の三階建ての建物が1880年創設の大学図書館(The George Forbes Memorial Library)です。約22万冊の蔵書、3万5千以上の電子ジャーナル誌、4万部の電子書籍を16人の図書館司書を含む30名のスタッフが管理しています。館内の表示が英語とマオリ語で書かれているのもニュージーランドならではの光景です。



The George Forbes Memorial Library

初めて図書館を訪れた折、館内には「飲食禁止!」の張り紙があちこちに見られるものの、カウンターから日の届かない場所にはお菓子の袋が散らばり、利用者の行儀の悪さに少しがっかりしたものでした。その数ヶ月後、入口のそばにラウンジが設けられ、そこでの飲食が許可され、コーヒーの自動販売機も設置されました。それ以来日立って館内は清潔になりました。禁止だけではマナーの向上を期待できない好例かもしれません。試験前の学生等、長時間図書館で過ごしたい利用者にとって、館内に飲食可能な場所があるのはとても便利なことですし、とくに定期試験前には通常より2時間遅い深夜23時まで開館していますから、ラウンジの存在はありがたいようです。深夜までの開館は、職員だけではなくアルバイト学生によっても支えられています。

もうひとつ目を引くのは、館内に「おしゃべり禁止」の場所があることです。つまり、それ以外の場所では会話が認められており、学生たちがパソコン画面を囲み、あるいは本のページを繰りながら談笑しています。図書館には多数のパソコンが設置されている上に、ワイヤレスランが整備されています。今時の学生にとって、論文やレポートの執筆には、印刷媒体のみならずインターネットでの資料検索が必須ですから、図書館のIT環境は大学のサービスの中でもきわめて重要になっています。

また、学内で得られない資料は、インターローン制度により、他大学から取り寄せることもできます。学術誌の複写はもちろん、国内他大学の博士・修士・卒業論文も届けられますので、未出版の研究成果および調査方法の詳細を知る情報源として活用できます。

さらに研究者にとって今や、研究室からアクセスできる論文検索システムと、新旧論文をダウンロードできる電子ジャーナルの質と量が、研究活動の成果を大きく左右します。リンカーン大学の自然科学系分野における両者の充実ぶりは、鳥類研究者の私としては心からうらやましい限りです。大学に籍を置く研究者の業績が、大学図書館の情報提供力にいかにか依存しているかヒシヒシと感じています。

もちろん一方で、中庭に面したソファに身を沈め、学術誌の最新号や新着図書に目を通すひとときも、くつろぎながらの幅広い情報収集には欠かせません。大多数の学術誌が既に電子化されつつあるとはいえ、紙媒体での情報提供と快適で知的な空間作りも、もちろん図書館の大きな使命であり続けるでしょう。